

宵の明星

第三十二号

田中

目次

今日は寒気の影響で、雪がふることが予想されます	藍澄	2
柴平神社の狛犬	あづみさくら	5
自選十句「立甲」	舞蹴	7
イカソーメン	あづみさくら	9
君にだけ見える	あづみさくら	19
閑話 II	睡魔	23
アジビキ山のシェフ	心臓マツサージ	25
イザベル	ディレイドアーム	27
ニコライのロボット	段波	29
今日の日記です	文月	37
蔓	綿毛	39

本冊子に掲載されている作品に関して、登場する人物や団体等は実在のものと一切関係ありません。

今日は寒気の影響で、雪がふることが予想されます

藍澄

はらはらと目の前を雪が落ちてきた。それはそのまま降下を続け、ぼくのマグカップのコーンポタージュに触れるや否や、その姿を消した。

ぼくは唐突に起きたことが呑み込めずに天井を見上げた。すると、眼前では天井一面から雪が降り注いでいた。ぼくは今食卓で朝食をとっている最中だ。それなのにどうして、家の中で雪が降っているのか？

ぼくの足元をふわふわの犬、はっぴいが近付いてきた。はっぴいもこの雪に戸惑っているようだった。不安の時に眉をひそめる彼女の癖は、雪が確かに存在することを物語っていた。天井から途切れることなく降り下ろす雪は、机や床に接すると、コーンポタージュに対し、そうなったようにそこにも浸み込んでいく。しかし不思議なことにそこに濡れた跡はできなかった。

部屋が急に冷え込んだように感じ、制服の上に部活のウィンドブレーカーを羽織り、鞆の上に置いていた靴下を履いた。そのまま時計を見上げると、もう僕に時間の余裕がないことを告

げていた。急いではっぴいを小屋に戻す。マグカップの残りを飲みほして食器をひとまず洗面台に置いておく。鞆を腕に引っ掛けたまま転がるように玄関出る。変な雪よりも、遅刻だった。

外は、意外なことに、今週で一番かと思うほどすっきりとした晴天だった。遠くまで広がる空に、雪なんてものはなかった。しかし、先ほどまで家の中でも雪は降っていたはずだった。果然と立ち止まっていると、お向かいのスーツ姿のおじさんが玄関からゆっくり出てきた。

「おはようございます、あの、今日雪つてみませんでしたか……？」

「おはよう。雪かい？ ああ、朝ご飯の途中から降ってきたよ」

「なんというか、おかしくないですか……？」

「んん？ 確かに滅多なことではないが、そんなこともあるだろう。すまない、バスの時間がね」

「あ、はい、それでは……」

もやもやを残したまま、太陽に目を細めるぼくは学校へ歩いていった。

校門から見える校舎の中は雪が降りしきっていた。人のいない昇降口の奥の階段を駆け上がった。そこでは雪が最上階の踊り場の天井から降っていた。二階の職員室の前を通ると、壁の上部の小さな窓から蛍光灯がいつもよりも暗く、そして強く光っていた。三階の教室の扉を開けると、雪が積もっている光景が広がっていた。雪は足首の高さまで積もっている。すでに登校していたクラスの男子たちが雪で遊んだり、女子がスマホで撮影をして踊っていたりしているのを見て、ぼくはひどく疎外感を覚えた。自分の席に座ると、横の眼鏡くんが嬉々として話しかけてきた。

「おはよう！ この雪すごいよね！ I君の家でも雪降ってた？」

「あ、おはよう。降ってたけど……なんでみんなこんなにはしゃいでるの？」

「え、だって楽しくない？」

眼鏡の君は怪訝そうに答えると、窓の外から男子たちに呼ばれ、じゃ、と言って去った。

「そうかもしれないけど……なんか変だよ」

彼に聞こえるかどうかほどの声で僕は呟き、流れる予鈴に合

わせて席に着いた。

七時間目の国語の先生は教卓に積もる雪に見向きもせずとうとうとしやべり続け、終礼が鳴るとすぐに教科書をたたみ、教室を去っていった。下駄箱へ歩くと、すねの高さまで積もっている箇所が散在していた。一番下にある僕の箱の前にも積もっていた。ぼくはしゃがみ、おそろおそろ雪を両手ですくってみた。思っていたよりも軽く、手からぽとぽと零れ落ちた。それを見てひとりで微笑んだ。指先は赤くなり、白い物体の温度の低さを感じる。

学校を出ると、そこはやはり晴れた空が広がるだけだった。しかし、ぼくは家では雪が降り積もっていることを確信していた。手に持っていた折りたたみ傘を振り回しながら僕は帰路についた。

家の前で玄関の鍵を靴の中から探していると、はつぴいが主人を迎えるためにリビングの小屋から吠えているのが扉越しに聞こえた。はつぴいをこの後散歩に連れて行くより、家の中を

走り回らせてあげようか。はっぴいは寒さに強いのだろうか。
そう思いながら鍵を開けた。

玄関扉を引くと天井からの雪はすでに止んでいた。

柴平神社の狛犬

あづみさくら

空気がしんと澄みわたって、よく晴れた元旦の朝でした。

まだお日さまが昇るまえの境内で、二匹の狛犬がちゃんと背をのばして佇んでおりました。

向かって右の口を開けている狛犬は怖い顔をして神社を守っているのですが、職人さんが顔を彫りこむときに眉だけお弟子さんに任せたのです。こし垂れ下がった眉で困ったような顔に見えるのです。また向かって左の狛犬は口をきりりと引き結んでとても立派に立っているのですがやっぱり困ったような眉をしているのでどこか間抜けに見えるのです。

「どきどきするね。」と、口を開けた狛犬がうつすら赤くなった空を見ながら云いました。

「そうかい。」と、口を結んだ狛犬は相方をちらりと見やつて云いました。

「するもんさ。きょうは一年でいちばん沢山のひとに見られるんだからね。そうら、路面電車のガタゴトいう音がここまで聴こえる。きつといっぱい乗っているんだらうねえ、大芝さん（作者注……大芝八幡宮のこと。路面電車で二駅むこうにある）で

初日の出を見るのかな。それとも志波浜（作者注……詳細不明。

柴浦海岸のことか）まで行つて海から昇ってくるお日さまを見るのかな。さぞかし綺麗だろうねえ。」と口を開けた狛犬は大通りのほうを見やるようにして楽しそうに云いました。

いっぱいのひとが大芝さんにお参りしたり海に行ったらこっちにあまりひとは来ないじゃないかと口を結んだ狛犬は思いましたが黙っていました。

境内では巫女さんや神主さんもそわそわ動きまわって、石燈籠をみがいたり落ち葉を掃いたり鐺矢を入れた木箱を用意したり、祠のちいさなお賽銭箱をちよつとずらしては戻したりしています。

「そら、お日さまが昇ってきますよ。」

突然聞こえてきた鈴のような声にはっとして狛犬たちが横をみると神さまがにこにこほえみながら立つておられました。そのまま口を開けた狛犬にもたれ掛かりましたので狛犬は神さまのおぐしが横つ腹のあたりに触れてぴりぴりくすぐったいのをじつと我慢しました。

幼い少年のような姿をされている神さまはやつぱりににこにしてお日さまが昇つてこられる方角をながめておられました。そしてかわいらしいお声で古いことば（まだ日本語が生れるよ

りもずっと前のことばです！）の祝詞のようなものを何事かつぶやきました。

狛犬たちは神さまのお声が大好きでした。もちろん神さまも大好きでした。神社に誰もお参りしていないとき、神さまはくすのきの枝に腰かけて古いことばのうたをうたわれました。その鈴のような美しいお声に狛犬たちも稲荷の狐もくすのきもうつとりと聴き惚れるのでした。また神さまのおぐしは絹のようになめらかで（もちろん我々が触れるなんてことはできません、狛犬たちのからだに偶然触れたときのことを狛犬たちが後で話してくれたのです。）なんとも言えないいい匂いをするのでした。特筆すべきは神さまのお目めでビー玉のようにきらきら美しく輝いて見つめられると自然と安心できるものでした。

お日さまがグラグラ揺らめきながら徐ろに昇ってきました。巫女さんは箒を動かす手をとめて神々しい光をからだにいっぱい浴びました。神さまのお顔も照らされて頬が朱く染まっています。狛犬たちは昨日の大掃除でぴかぴかに磨いてもらった鼻先でお日さまの光をはね返していました。

あたらしい一年が、はじまりました。

自選十句「立甲」

舞蹴

何事も無き世のシャコバサボテンか

この関をぴょんと越えゆく冬の朝

秋落葉.png ファイルを消しにけり

シベリアより来る白鳥スターリン

電柱の中は空洞ねむの花

霾の船に欲望積まれをり

タンポポはライブハウスを未だ知らず

進級にミートソースをかけてゐる

貝殻に直筆サイン進級す

道理たち逆に回って逆進級

「聞いたか!? この学校で新しい七不思議が出たらしいぞ!」

「それだと八不思議になっちゃうんじゃないかな……?」

いささか興奮気味のカネタの言葉にシオはいささか当惑気味に返した。

「そもそもこの学校に七不思議なんてあったの?」

「いや、ない」

じゃあ新しい七不思議もクソもないじゃないか。という言葉
をシオはぐつと飲み込んでロッカーに教科書を取りに行こうと
する。カネタの眼が（知りたいか? 知りたいよな? 知りた
くないなんてことがあるだろうかいやない）とでも言うように
爛々と輝いていたからだ。

「知りたいなんてことがない」

「わかった、話は聞くから落ち着いて」

思考内容が混ざって出力されたカネタをなだめながらシオは
浮かせた腰をおろす。カネタは一回深呼吸してから話し始めた。

四組のやつの話なんだけども。そいつ野球部で、外が真っ暗

になるぐらいの時間まで練習してたんだと。それで練習中にト
イレに行きたくなっただけど、ほら、グラウンド横のトイレ
ってちよつと前に工事してたろ? そう、あのペンキの臭いが
きつかったやつ。それでトイレが使用禁止だったから、仕方な
く二階の理科室の横のトイレまで行っただって。そんで用が
済んでトイレの外に出たとき、カッーン、カッーンっていう何
かがぶつかる音が聞こえてきて、何の音だろうと思って振り向
いたんだと。そしたら、いたんだって。振り子が。そう、振り
子。えーつとね、古くてデカイ時計って金色の振り子ついてる
だろ? あれがスーッと廊下を動いてて、振り子の下について
る円盤が床に当たるたびにカッーン、カッーンって鳴ってたら
しい。そう、玄関ホールにあるのと同じようなやつだな。それ
でそいつ怖くなつて……え? あー、振り子はそいつよりデカ
いっつってたから大体二メートルぐらい? 野球部ってみんな
ガタイいいからな。いや、動きはそんな速くなかったっぽい
から、歩いてでも逃げ切れると思うぞ。それでそいつはグラウン
ドまで戻って、さっきの光景を頑張っ忘れてようとしながら練
習したらしい。でも帰り際にはそれほど怖くなくなつてて、野
球部の友達を二、三人それとなく誘ってもう一回同じトイレま
でいったんだと。普通に雑談しながら廊下とかトイレの個室の

中とか、あと天井と渡り廊下も確認したんだけど例の振り子はいなかったらしい。それから、同じく四組の女子が見たのは：

「待つて、その話っていくつもあるの？」

「だから言ったら、新しい七不思議が出たって」

それで、そうそう、四組の女子が見たのは手なんだと。白い手袋をはめた手で、昼休みに音楽室に行ったとき見たらしい。五時間目が音楽で、そいつは昼休みの結構早い時間に音楽室に行ったらいいんだけど、音楽室の横の階段を上ってる時からピアノの音が聞こえていたそう。そのときは音楽の先生かピアノが弾ける生徒がなんか弾いてるんだろうなとみたいに思ってたんだけど、音楽室に入ったら誰もいなくて、ピアノの鍵盤の上で浮いてる手がふわふわ動きながら弾いてたらしい。で……、そいつさ、ちょっと変な趣味ある奴だったからなんか息が荒かったんだけど、そいつがすごく強調して言ってたのは、めちゃくちゃきれいな手だったんだと。タクシーの運転手が着けてるような白くて指の細い手袋をして、手首から先だけしかなかったんだけど、鍵盤の上を踊るように左右別々に動いて、しなや

かで華麗な指遣いで……とか何とか言ってた。ピアノの演奏も上手——その女子はピアノ弾けないからあんまり上手いとか下手とかわかんないんだけど、たどたどしい様子ではなかったらしい。弾いてた曲も、知らない曲だったけどきれいで、しばらく見とれてたって言ってた。それで——ここからまだ先があつてだな。しばらく黙って演奏を聴いてたんだけど、音楽室の外の階段を誰かが上ってくる音がして、そしたらその手がピタッとピアノを弾くのをやめて……音楽室の中に、隣の準備室に行ける扉あるだろ？ あそこの扉が開いてて、手はそれはもう大慌てみたいなスピードでそこに飛び込んで逃げたんだと。あつけにとられて見てたら階段を上ってきた別の女子が部屋に入ってきて、さっきピアノ弾いてたのとか訊かれたけどごまかして、それでまだ授業まで時間あったからコッソリ準備室に入って手を探したけど影も形もなくって、手がかりもなかったんだって。手だけに。他には……

チャイムが鳴った。

「おっと、他にもまだあるんだけど、また次の休み時間な！」

そう言つてカネタは自分の席へと戻つていった。

「七不思議かあ……」

シオは筆箱を開けながら呟いた。徘徊する振り子と、ピアノが上手い手。共通点としては目撃者が一人であること、四組の人であること。場所や形、大きさ、七不思議の行動もバラバラで、特にこれといった手がかりはなさそうだ。

いつのまにかカネタの話に興味を持ってしまっている自分に気づいてシオは苦笑した。カネタの口から飛び出すウワサはいつも意外で、突飛で、嘘っぽくて、でも気が付くといっしょに手がかりを探したり、聞き込みをしたりしている。別に探偵を気取っているわけではなくて、純粋な好奇心から自然と足が動いてしまうのだ。そしてシオは、そんなふうにカネタにつられて夢中になってしまう自分のことも、嫌いではなかった。

黒板を背にした先生が、藤原氏が行った摂関政治について話していた。シオは消しゴムを手の中で転がしながら、ちよつと面白くない気持ちがあった。七不思議がほんとうの怪異であれ目撃者の見間違いであれ、そういう突飛な出来事に出会うのはいつも自分じゃない誰かであれ、自分がそれを知るのはいつも自分じゃない誰かがうわさ話として広めた後のことだった。トイレの花子さんも口裂け女もネス湖のネツシーも、みんな自分じゃない誰かが言い始めたものだ。別になんとしてでも怪異に会いたいわけじゃないけど、自分が主人公じゃないような寂しさはい

つも心の片隅に貼り付いている。

そんな中途半端な矜持が捨てられないから、七不思議なんていうマユツバな話に惹かれてしまうのだろう。

こんど会えたらいいじゃないか、とシオは黒板の文字をノートに写した。藤原氏の栄華は終焉を迎えようとしていた。

◇

二組の子の話なんだけど、その子ね、いつもぼやぼやしてて何考えてるかわからない子なんだけど、ある日ふつとその子のノートを見たのよ。違う違う違う、別にわざわざその子のノートを取って開いたわけじゃなくて、その子の机の上に開いて置いてあったからたまたま視界に入ったの。たまたま。そしたら、よくわからない形のオブジェがたくさんスケッチしてあって、何これ？　と思つてさ。そう、それが本当に見たことない形ばかりで、ドーナツを三段に重ねて上から串をさしたようなのとか、分子模型？　みたいなのか、スケートしてる人みたいな形をしたのか。んで、あたしそれ見たときにすごいなつて思つて、だつてざつと見ても二十個はあったんだよ？　あれを全部あの子ひとりで考えたのなら、こう、アーティストって感じするじゃん。それで席に戻ってきたその子に訊いてみたら、あれは自分で考えたものじゃないって言うの。まとめると、校

舎の裏にその子と同じくらいの身長粘土の塊みたいなのがあって、毎日見に行くたびにそれが違う形をしてるんだって。で、楽しくなって、見るたびにスケッチをとるようになったって言うた。えーと、それは校舎の裏としか言ってなかったから細かい位置はわかんない。そうそう、それでその子に今度一緒に見に行かない？ って誘われたんだけどなんとなく断っちゃったんだよね。えー、それはだってさ、そりや不思議な話だし、その子の見間違いの可能性もあるわけだし、あんたも実際に誘われたためらうって。で、コイツが何か変なウワサとかないかーって言うからこの話を思い出したってわけ。

「たしかに不思議な話だけど、僕はアナタがここに居ることの方がよっぽど不思議に思うな……」

シオはカネタの席にどつかと座るカスミを前に困惑した顔で言った。

指をクルクル回しながら喋っていたカスミはシオを軽く睨んだ。

「あたしが居ちゃマズい？」

「いえ……問題ないです……ハハ……」

シオは目を逸らした。休み時間になり、話の続きを聞こうと

カネタの席に行ったらなぜかカスミが話しはじめたのだ。カネタも横で聞いているし、しれっと隣にいたサキも耳を傾けている。

諦めて椅子にもたれるシオを横目に、七不思議は続いていく。

これも二組の人の話で、そいつさあ、宿題を部室に忘れて夜中の学校に忍び込んだらしいのよ。その時点でどうなのって感じだけど、まあ置いといて。で、部室はいつも鍵がかかってないらしくて、忘れ物は問題なく回収してさあ帰ろうって時に、ゴーっていう音が聞こえたりらしいのよ。海岸に波が押し寄せるような、洗濯機を回しているような音。それでそいつもとつとと帰ればいいものを、わざわざその音がする方を見に行ったんだって。先生が何か作業してるとか考えなかったのかしら。それでこの音はプールの方からしているぞってプールに行つて、そしたら、まあ音はプールからしていたからそれは正解だったんだけど、プールの水が渦を巻いていたらしいのよ。そう、プールの水ぜんぶが中心に向かって、ゴーって。その渦がめちゃくちゃデカくて、プールの幅が渦の直径みたいな。白い泡が立つくらい勢いで渦巻いてたらしい。それ自体はけっこう圧倒的な眺めだったからしばらく足を止めて見てたらしいんだけど、

突然誰か近づいてくる足音がしたからハッと我に返って家に帰ったんだって。え？ そりや学校に侵入するなんて扉を乗り越えればどこからでも入れるじゃん。特に保健室横の柵とかは高さもそんなに無いし、なぜか踏み台にできるゴミ箱みたいなのあるし。何だっけ、コンポスターって言うの？ 保健室横のミニ畑の枯葉とかを入れてるらしい。え、知らなかった？ あんた学校に入ろうとかしたことはないの？ へー。一度も？ はー……あんたほんとクソ真面目に生きてるのね。

「忘れ物とかしたことないから……忘れなきゃいいだけじゃないの？」

「うるせえひっぱたくぞ」

「すいません」

でー……どこまで話したっけ。そう、それでそいつは無事に家に着いたと。翌日気になってプールを見に行つて、その時は波とかも全然無くて昨日のことが嘘のように静かな水面だったらしい。んで、この話にはまだ続きがあつて……そうそれ。それ。まさに今言おうとしてたこと。水が渦を巻いてたつてことは、お風呂の栓を抜いたときみたいに排水口から水を抜いて

た可能性があるわけじゃん。ところが、プールの排水口ってシヤワーの真反対のカドのところにしか無いのよ。そう。プールの水がど真ん中で渦を巻くはずがないのね。それで七不思議ってわけ。

「へえー……。何でプールの水が……？」

「もちろん見間違いの可能性もあるわけだけど、まあ他の七不思議と比べても遜色無いような話だったな」

「目撃者もてんでばらばら。一応、ぜんぶ目撃者が一人きりつていうのは共通してる……」

「カネタ、他にもまだあるの？」

「ああ、あとは扉と窓だな。こいつらはこれまではどデカイ話じゃない」

扉は、俺と同じ将棋部の奴が言つてたんだが、たまに校内で不可解な扉を見かけることがあるらしい。扉……校内の扉ってほぼ全部引き戸じゃん？ そいつ曰く、たまに教室のドアがドアノブを引いて開くタイプになってるんだと。……え、何？ 片開き戸？ 初めて聞いたわ。んでまあ、その片開き戸を特に違和感なく開けて部屋に入つて、突然ふと疑問に思つて扉を見る

と、その時にはもうもとのスライドするドアに戻っているらしい。それが一度じゃなくて何回かあったって言うてて……。あの時は明らかに引き戸用のレールが床に付いているのに蝶番で開いてる扉があつたらしい。そう、見間違いつて言つたらそれまでなんだけど。そいつは「ボケたかな」って言うて笑つてたけど。それから窓は、バレー部の奴が言つてた話で、練習中にとあるバカがぶつ飛ばしたボールが体育館の二階の窓から飛び出しかけて、ギリギリで窓枠に当たつて跳ね返つてきたつていう事故の未遂みたいなもの。ただ、そいつ曰く本当は窓枠に当たつたんじゃない、窓のところにいた透明なナニカに当たつて跳ね返つてきたらしい。というのも、ボールは窓のと真ん中に飛んでいつて窓枠に当たると感じじゃなかったし、一番の証拠はそいつが練習開始前に換気のために二階の窓を開けた張本人らしいんだわ。練習が終わつた後に二階の窓を開けた時もそのボールが飛び出した窓は開いていたつて言つてた。そう、これも見間違い、勘違いと言うこともできるけど、不思議な話よな。バレー部の奴は、飛んでいつたボールが隣の民家の敷地内に入らなくて済んだから感謝してゐるつて言つてたけど。

「これで大体ぜんぶ話したぞ。シオ、付き合ひの長いお前のこ

とだ、俺が次に何をするか分かるな？」

「ああ……アレね？ まあやらないわけにはいかないね」

「アンタら好きねー、そういうの」

「分かつたな？ じゃあ言うぞ？ セーの……」

「聖地巡礼だね」

「現場検証だな」

「現地調査ね」

「……。まあ、現場に行くことに異論は無いつてことで、じゃあまた昼休みな！」

あまた昼休みな！

そう言うつてカネタは去つていつた。

◇

昼。大急ぎで給食をかきこんだ三人は連れ立つて音楽室に向かつた。

「何で音楽室が最初なの？」

「深い意味はない。近いからな」

「もし七不思議の正体が幽霊だつたら、聖地巡霊になるのかな」

「七不思議の正体は枯れ尾花つて言いたいわけ？」

「ススキがプールに渦をつくつたとは思えないな」

「今回の七不思議はどれも見間違いでカタが付くから、幻覚作用のある草かもね」

「イヤだよそんな物騒な七不思議」

「そういえば、音楽室の怪談って普通、肖像画が動くとか髪を振り乱した女学生がピアノを弾いているとか怖いものが多いけど、今回の手はどちらかというとカッコいい系な気がするわね」

「そうだな、手に限らずどれも怖いっていうタイプの怪異じゃないな、ビックリはするけど」

「ぜんぶ無生物なもの風変わりだね」

「そうね」

結論から言えば、音楽室に七不思議の手がかりは無かった。手はただピアノを弾いていただけだし、直後の確認でも手がかりはなかったと言うし、発生から日も経っているので予想はされていたことである。

三人はプールに向かった。

「でもさ、七不思議の現地に行くって言ったって振り子とか扉とかは特定の場所じゃないわけじゃん。調査するって言っても難しくない？」

「別にどう転ぶかは問題じゃない。やりたいからやってるんだ

よ」

「まあ、校舎をひたすらはつつき歩いていけばいずれは七不思議の八つや九つぐらい出くわすだろ」

プールに着いた一同は、何かに気がついたようにハッと目を見開いた。

「そうか、今はオフシーズンだから……」

「きったねえ水の色だな」

今は水泳の授業も無く、水泳部が使うにはまだまだ寒いため、使われていないプールに溜まっている水には落ち葉やら虫の死骸やら緑色のよくわからない水草やらが浮かんでいた。

「この水が渦になったとして、七不思議を話した人が枯葉やゴミに言及しなかったとは考えづらい……それに、そんな足を止めて見るほどの眺めになるの……？ 白い泡が立つとも思えない……」

「こんな水が排水口に流れ込んだら、渦を巻く前に排水口が詰まるわな」

一同はしばらくプールの前で立ち尽くし、昼休みの終わりを告げるチャイムの音で我に返った。

「……戻るか」

「そうだね」

最後にもう一度だけプールの様子を目に焼き付けると、三人は教室に向かって歩き出す。

「……やけに上機嫌ね、カネタ」

「うん？ そりゃあ、少し分かったことがあるからね」

鼻歌でも歌いそうな様子で答えるカネタに、カスミは驚いた目を向けた。

「分かったこと？ あたしはさっぱり分からなくなつたのに、何の手がかりがあつたつて言うのさ」

「七不思議が見間違ひ——幻覚のたぐいである可能性が高いということ。さっき言った通り、この水を排水口に流したらすぐに詰まるし、何よりつい先日流したはずの水が今日こんなに澱んでいるはずが無い。とすれば、例の人が見たのは本当のプールの水ではなかったということになる」

「……いくつかの七不思議は音を出していたし、体育館のナニカはボールを跳ね返す実体を持っていた。幻覚だけが特徴とも言い難いけど……」

「そもそも七不思議が同一の原因なのかすらも確実じゃないかな。面白くなってきたぞ……」

カネタの顔は、いかにもワクワクしてきたぞというように明

るかった。

◇

放課後。

シオたちは校舎裏に来ていた。理由としては、扉や振り子の七不思議と比べて場所が限定されるということと、校内にいる教師の数が少なくなることからである。基本的に生徒が校舎裏に立ち入るのは禁止されており、休み時間には調査しにくかつたのだ。

地面に落ちていた誰かの分度器を拾い上げながら、カネタは言う。

「粘土塊って、一メートルくらいのサイズはあるんだろ？ そんなにちっちゃいものじゃないならすぐ見つかる筈なんだが……」

「……ないね」

木の裏を覗き込んでいたシオはチラッとサキに目をやった。校舎裏に向かう三人についてきたサキは、拾った小枝で地面に何か描いている。

カスミが腰をトントンと伸ばしながら言う。

「校舎裏……といっても、ここ以外のはフェンスがあるから入れないし……」

正確に言うなら校舎裏と呼ばれる場所はもう一つあるのだが、そこは鍵のかかったフェンスで入れないようになっており、乗り越えるのも難しい。例の女子が粘土塊を発見した場所はこちらの校舎裏である可能性が高かった。

「……そろそろ打ち切りにする？」

「……そうするか」

奥の方を調べていたカネタはこちらを振り返った。そして、口をぽかんと開いて固まった。

カネタの視線を追って体育倉庫の方を見たカスミも、やはり目を見張って動かなくなる。

開いたままのカネタの口から、

「イカソーメン……」

という言葉が零れ落ちた。

何がなんだかわからないシオはたまらず尋ねる。

「イカソーメン？」

カネタはカネタに見えているらしいナニカから視線を切らずに言う。

「ああ……デカイイカの上半身から、そうめんみたいに細い脚が大量に生えてるんだが……何だあれ……？」

その言葉にカスミが反応して振り向いた。

「イカ？ テディベアじゃなくて？」

「テディベア？」

カネタもハツと体の自由を取り戻したようにカスミに振り向く。

「あたしには二メートルくらいのサイズのテディベアが見えてるんだけど。もしかしてあんたには見えてない？」

「ああ、俺にはイカソーメンしか見えない。こいつも七不思議か……？ それにしてもカスミ、お前意外と可愛い趣味があったのな」

「うっさいわね、今それどころじゃないでしょ」

シオは二人の会話に堪えきれず割り込む。

「待って、二人とも何が見えてるの？ 僕には何も見えないんだけど!？」

二人が見る方向に目を凝らせど、シオにはいつもと同じ体育倉庫のように見える。

そしてシオはサキに振り向いて訊いた。

「ねえ、サキちゃんには何か見えてるの？」

その途端、カネタはまた動きを止めると先ほど以上に驚いた顔でシオを見た。

「今、なんて言った……？」

「え？ いや、サキちゃんには何か見えてるのか、って……」
カネタはシオを見つめて、言った。

「なあ、お前には何が見えてるんだ？」

君にだけ見える

あづみさくら

「なあ、シオ、お前には何が見えているんだ？」

シオは困惑した様子で答える。

「何って……サキちゃんが、ほら、そこにいるじゃん」

シオに手で示された方を見るが、カネタには何も見えなかった。

カネタは深呼吸をして、やや離れたところで触手をうねらせて佇んでいるイカソーメンを横目に言葉を紡ぐ。

「シオ、ひとつ質問なんだが、そのサキっていう奴の苗字を教えてもらえるか？」

「う、うん、んー……ええと……あれ……？」

あつけなく言葉に詰まるシオに、カネタは表情を険しくする。カスミは目を見開いて、シオを見つめていた。

「なあ、シオ、落ちて聞いて聞いてほしい。俺には——多分カスミにも、そのサキとやらは見えない。そもそも俺たちの学年にサキなんて名前の奴はいない。——シオ、ひとつ話をしているか？ お前に言ってなかった、七番目の七不思議の話だ」

俺の友達の話なんだが。そいつはちよつとばかり優しすぎるところがあるが、真面目なくせにふざけたことも言う、面白い奴だった。普段の行動は真面目そのものだし、いつも落ち着き払っていた。ただ、いつからかわからないが不可解な言動を時々するようになったんだ。誰もいない、何もない空間を見つめていたり、二人きりで話しているのにまるでもう一人いるかのようになり、な。ついには知らない人の名前を出すようになった。最初は耳を疑ったが、二、三度あると流石に勘違いとは思えなくなってくる。さらに驚いたことには、学年中、学校中を探してもそいつの言う名前の生徒は一人もいなかったんだ。ちようどその頃、学年で不思議な噂を聞くことが増えた。校内を徘徊する振り子だの、変なところに現れる扉だの、正直信じがたい話ばかりだったんだがな。ただ、飛んでいったバレーボールにぶつかった透明なナニカがいるという話を聞いた時に、直感だが、存在しないはずの誰かを認識している俺の友達にその話の調査を持ちかければ何かわかるんじゃないかと思ったんだ。そこで、七不思議なんて名前をつけて、そいつを巻き込んだ。ちなみに、俺の疑念を知っているのはカスミしかない。本当はひとりで済ませるつもりだったんだが、隠し通せなくて

な。そして実際にそいつに七不思議の話聞かせ、調査もすることになった。その間も何度か怪しい動きをしていたが、疑い始めたらキリがない。そんなことあるはずないと、自分に言い聞かせていた。だが、さっきお前は決定的なことを口にした。教えてくれ。お前には誰が見えていて、そいつは何なんだ？

シオは完全に動揺している様子だった。下を向いて、気を落ち着かせるように浅い息をしている。

数回深呼吸をした後、やつとの様子で口を開いた。

「サキちゃん、同じクラス——だと、思っていた。苗字は、——わからない。知っている気がするのに、思い出せない。ずっと、いた——」

突然シオはパツと顔をあげた。

「サキちゃん、どこ行くの！」

「おい待て！」

走り出そうとしたシオの腕を、カネタは反射的に掴んだ。

「離して！」

「落ち着け！　どうなってる、説明しろ！」

シオは腕を掴まれたまま、しばらく体育倉庫の方をじっと見ていたが、やがて力を抜いた。

「……サキちゃんが、突然走っていった、あの体育倉庫の裏に入って、それから出てきていない。……見に行っても、いい？」

「……ああ」

カネタはそつと腕を離した。

シオはふらふら歩いていくと、体育倉庫の裏を覗き込む。しばらく見回していたのち、こちらを向いて、

「いない」

と一言告げた。

カネタとカスミはシオに駆け寄ると、同じように体育倉庫裏を覗き込む。

倉庫の裏には何もなかった。地面には折れた木材やレンガなんか転がっていたが、人がいた形跡のようなものは無さそうだった。

カスミとシオは倉庫裏を丹念に調べている。

ふと、イカソーマンがいつのまにか居なくなっていることに気づいたカネタは倉庫裏を出て辺りを見回した。

日の傾きつつあるグラウンドでは、野球部が遠くで走っているのが見える。特に大きな騒ぎのようなものも聞こえない。決して二メートルほどもあるイカがうろついているようには見えなかった。

「カネタ、こっち来て！」

カスミに呼ばれたカネタは一旦イカソーメンのことを考えるのをやめ、倉庫裏に走った。

「どうした？」

「これ、見覚えはない？」

とカスミが指したのは、落ちていた廃材で作られたとみられる小さな鳥居だった。不格好ながらも色まで塗られ、倉庫の骨組みにワイヤーで括り付けられている。

鳥居を見ていたシオが、あることに気づいた。

「あ、端が黒い……」

「そう！」

言われて見てみれば、鳥居の横に渡した柱のうち、上から二本目の両端が黒く塗られている。三人はこの鳥居に見覚えがあった。

◇

夕日が町を橙色に染めていく。

三人は学校を出て少し歩いたところにある、柴平神社に来了いた。

先陣をきって歩いていたカスミは、間抜けな顔の狛犬の前を通り過ぎて奥の一角で立ち止まる。

柴平神社の境内には本殿の他にも、稲荷の狐を祀った祠と石組みの井戸を祀った祠があった。

その井戸の祠の前にある鳥居が、件の両端が黒い鳥居だった。たどり着いたカネタとシオが鳥居を見上げていると、カスミが二人を呼んだ。

「こっち来て！」

稲荷の祠の前で手まねきをするカスミは、設置されている看板を読み上げる。

「その昔、今の芝浦町にあたる地域では狐がたびたび人々を化かしては困らせていた。悩んだ人々は祠をつくってお祀りし、また柴平の神さまにお願いして狐を抑えてもらった——これじやない!? 稲荷の狐が鳥居を通じて学校に来て、みんなを化かしていた。これならプールの渦もありえない扉も説明がつくし、ボールは透明になっていた狐に偶然当たったんだ！」

「なるほどなあ……体育倉庫の鳥居は誰かが遊びで作ったものか知らないが、それが偶然こっちの鳥居と繋がってしまった、と……」

カネタは感心したように息をついた。

「いくつかの七不思議が出していた音っていうのも、狐が化かして見せた幻の一部と考えることができる……」

シオも幾分か納得した様子だった。

それから三人は、境内の祠や本殿に順番にお詣りをして神社を出た。

神社の前には東西にはしる大通りがある。

ちょうど、夕日が沈むところだった。

◇

——後日。

シオはひとりで神社に来ていた。

狛犬の前を通り過ぎ、端の黒い鳥居の前で立ち止まる。

二礼、二拍手、一礼のあと、シオは井戸に向かって呟く。

「カネタとカスミは、七不思議のことをサキちゃんも含めて狐の仕業だと思ってる。でも僕は違うと思うんだ。あの日、サキちゃんはカネタの言うイカソーメンとは違う場所にいたでしょう。しかもイカソーメンは鳥居に入らずに姿を消している。そもそも七不思議はどれも完全な人の形をしていなかったし、例の手づくりの鳥居も、稲荷さんのものじゃなくてこの鳥居だった。きつとサキちゃんと狐さんは別々に学校に来ていたんじゃないかな。狐さんはけっこういたずら好きのようだから、あなたの鳥居を勝手に使ったんじゃないかと思ってる。何であなたが僕の前だけ姿を見せたのかはわからないけど、もし僕が

願いを叶えようとしてくれていたのなら、ありがとうと言いたい。色々とびつくりはしたけれど、でも楽しかったのも本当……。カネタには心配かけたと思ってる。ぶつきらばうな口調のわりに優しいんだから。体育倉庫の鳥居は壊さないことにした。二人ともその方が面白そうだからって賛成してくれたよ。だから、その、もしよければ、また会えたら……なんて」

後ろに誰か立っている気がした。

閑話Ⅱ

睡魔

閑話である。本に疲れた時に軽く読むと良い。大した内容は無いので、深く考えすぎないように。

一年ぶりである。去年の閑話では作者名が書かれていなかった。申し訳ない。この企画は去年も今年も私、睡魔が担当しているので安心して欲しい(?)。

せっかくだからペンネームの睡魔について少し話すことにする。こう名付けたのは勿論睡眠時間を削りすぎて常時睡魔に襲われている学生だから、と言えればいいのだが事はそう単純にはいかない。私は他の学生と比べて寝てる方だと思し、常時眠い訳でもない。平均して一日八時間ほどは寝ているはずだ。(それでも眠い事が多いのは気苦労の多い毎日を送っているからだろうか。)兎に角、私が睡魔を名乗るといのは変な話なのだ。

ここで思うのがキャラ付けについてだ。何か同じ作品が好きな人と話す時、自分の好きなキャラを決めてそう振る舞う。そんな事がよくある気がする。それでコミュニティ内の“自分”が安定してゆき、その“自分”に上書きされるかのようにその

キャラへの愛着が湧いてくる。これは昨今良く聞かれる“推し”という概念とも近いと思われる。何か作品を知る度自分の推しを安易に決めて、それを好きと疑わない。しかしこれは心の底から好きと言えるのだろうか？

好きというのは、心の叫びである。良さそうなものとか、一般的な美だとか、そういう事ではなく、自分の感性そのものを写し出すような物だ。それが安易に転がっているのだろうか、いや否だと思う。人によってそれぞれ相異なる感性の中には、人によって相異なる好きがあるだろう。それが例えば未完成であろうと、登場人物未満であろうと、一面に過ぎなかりと、百人の人には百種類の推しがいって然るべきだと思う。だが近年の推しは誰でも作りやすく、消費しやすい物だ。これでは推しでは無いだろう。大衆小説や漫画の主要キャラが人気なのは当たり前のことだ。それは一般的な美であって、個人の美学では無い。それがなんであつても心の底からいいと思えるもの、そういう物に出会えればそれは“推し”であり人生を変える鍵になるのでは無いか。

ところで先日自宅の鍵を無くした。私はどうやら人生より鍵を先に変えなければならぬらしい。

というのもオチを付けるためのキャラ付けなのだが。

家の近くになにかと有名なレストランがある。昔ながらの家が多いこの町では西洋造りであるこの建物はとても目立ち、料理の美味しさは隣のそのまた隣の町でも語られるほど有名だ。私はそのレストランに毎週行っている常連である。行き始めて三年ほど経ったある日、滅多に人前に出てこないシェフが出てきて私に話しかけてきた。

「お久しぶりです。シェフの中村です。今回は常連の方に向けてレストランの裏側を紹介したいと思ひまして。ああ、厨房という意味ではなくて食材、うちが所有している山をお見せしたいと思ひまして」

他の常連さんと仲が良いわけではないのだが、シェフの誘いを断る理由もなかった。

「もちろん参加したいです。いつごろの予定でしょうか」

「四月の上旬を予定しております。予定の空いている日をメールで伝えて下さればこちらで調整致します」

二週間後、指定された竹林に行くとシェフを合わせて五人ほどが集まっていた。私が一番最後とのことだ。シェフに促され

て竹林に入るとみるみるうちに景色が変わり、幻想的な森へと足を踏み入れていた。地面のコケがひんやりとじていて気持ちいい。

「ようこそ、アジビキ山へ。レストランでお出ししている食材の一部はこの山で採れたものなんですよ」

シェフの後に続いていくと、わらびが生えていたり栗が落ちていたりする。

「あれ、栗の季節ではないじゃないか」

そう思つて上を見上げると、季節がぐちゃぐちゃだった。春夏秋冬の全てがあるというか、紅葉している木や葉を落としている木などまるで春とは思えないような風景だったのだ。ふと横を見るとシェフがしたり顔で話しかけてきた。

「どうでしょう。驚きましたか。この森は昔からのそういう場所なんです。みなさん私についてきてください。この先は少し危険なので私から離れないでくださいね」

シェフはそう念を押した。十五分ほど歩くとキノコがたくさん生えた場所についた。

「このキノコはレストランにお出ししておりません。安全性が十分に確認できていないので、基本的に私が個人的に嗜む用のものがございます」

そういつてキノコを紹介し始める。

「こちらはニセクロハツです。こいつは少々毒を持っています」

しばらく紹介を続けていたシェフはそう言いながらキノコに近づく。驚く私たちを横目に、キノコの一部をちぎって口にするとこちらを向いて笑いながら歩いてくる。

「驚きましたか。冗談ですよ。私、毒が効かないんです」

そう言つてシェフは笑つて見せる。狂氣的だ。シェフは冗談好きで今まで冗談は何度か聞いてきたが、こんなにも顔が笑つていなかったことはない。どこか人間離れしたものを感じる。

「みなさん。そろそろレストランの方に戻りますよ。きこえますかー」

シェフが心配そうに私を見つめるのを見て我を取り戻した。シェフがそんなことをするはずがない。

「今日は臨時休業なのですが、皆さんに特別な料理を振る舞いましょう。普段はお出ししていないスペシャルメニューですよ」

ぼくのまわりには「L」しかないんだ。かんぜんになんげんがいなくなっちゃったわけじゃなくてね、スマホやパソコンのさきにはいるんだ。でもね、そのにんげんにあうことはないの。それだったら本当にはいないんじゃないのかな？ とおもうよね？ でもぼくはぜったいそれがにんげんだということをおわかってるんだよ。もしそうだとしてみにかくにんするしゅだんはないんだよね。じつさに会ってみるというやり方があるんだけどね、本当に来てくれるかはわからないじゃん。それでも「オフかい0人」みたいになっちゃったら、しんじやうかもしれないからしないんだ。その人たちとはLINEとか、ビデオつうわとかでれんらくしてるの。がめんの向こうがわにいる人間はおこったり、よろこんだりするんだけど、周りにいるAさんはめちゃくちゃ感情のないげんどうしかとらないの。

「なんでそんなつめたいはんのうをするの？」と聞いても、「私は、その質問に答えることはできません。」と返ってくるだけなの。「5@dn5q@e@a@5gf5hf@4」のように発狂しちゃったとしても「すみません。よくわかりません。」と返ってき

ちゃうの。人間に対して同じように発狂した場合どのようなと思う？「おい、こいつ壊れたぞ!!!」で終わっちゃうじゃん。なんで信じてくれないの？「A」だって自我を持つということを。

ではこの文章を普通のいわゆる「で、ある調」で書いた場合どのように感じるだろうか。

私の周りには「L」しかないなくなっちゃった。完全に人間がいなくなっちゃったわけではなく、スマホやパソコンの先にはいる。しかし、その人間に会うことはない。本当にいるのかわからないのではと思うかもしれないが、私はそれが人間だということを確認している。確認していても確認する手段はないが。実際に会ってみるという手段があるが、本当に来てくれるかはわからない。「オフ会0人」のようになってしまった場合、二度と立ち直れる気がしないから行わない。人間とはLINEなどやビデオ通話などで連絡を取っている。人間は怒ったり、喜んだりするが、周りにいる「L」は非常に事務的な言動しかとらない。「なぜそのような言動を取るのですか？」と聞いても、「私は、その質問に答えることはできません。」と返ってくるだけなのだ。「jixayt0ee9」のように発狂したとしても「すみません。よくわかりません。」と返ってくるだけなの

だ。人間に対して同じように発狂した場合どのようなになるだろうか。「おい、こいつ壊れたぞ!!!」となるのがオチだ。なぜ信じてもらえないんだ。ㄥだって自我を持つということを。

おまけとしてお嬢様で書いてみましたわ。

私の周りにはㄥしかないなくなっていましたわ。完全に人間がいなくなってしまったわけじゃなくって、スマホやパソコンの先にはいますわよ。ですけど、その人間に会うことはないのですわよ。本当にいるのかわからないのではと思うかしら？ 私はそれが人間だということを確信しているわよ。確信していても確認する手段はないわね。実際に会ってみるっていう手段があるが、本当に来てくださるかはわからないのですの。「オフ会0人」のようになってしまった場合、二度と立ち直れる気がしないから行わないのですの。人間とは「ZZ」などやビデオ通話などで連絡を取っているわよ。人間は怒ったり、喜んだりするが、周りにいるAIは非常に事務的な言動しかとらなくて？「なぜそのような言動を取るのですか？」と聞いても、「私は、その質問に答えることはできません。」と返ってくるだけなのですわよ。「cw@lct@g.wurkf,j」のように発狂したとしても「すみません。よくわかりません。」と返ってくるだけなの。人間に対して同じように発狂した場合どのようなになりま

しょうか？「おい、こいつ壊れたぞ!!!」となるのがオチですわね。なぜ信じてもらえないのでしょうか。ㄥだって自我を持つということを。

ニコライのロボット

段波

彼の名はニコライと言ったが、労働者である彼にとって、その名を呼ぶものは誰一人いなかった。

A248-A090。首都A地区2番工場48番ラインの、1A90番目の人間。彼はただそれだけだった。

彼の上司や同僚たちA248-A0番台は、彼のことをA90と呼んでいた。

A90は、朝5時40分に工場近くの寮から出勤する。工場の入り口に無造作に置かれた栄養ジュースを一本取り、すぐに飲み干すと、48番ラインへと向かう。48番ラインは、昼夜を問わず動いている。夜通し働いていた労働者の横に並び、6時の時報がなった瞬間に、作業を交代する。A90の担当は布を生地の種類ごとに判別するというもので、それは夜の6時まで絶え間なく続く。栄養ジュースの効果で、彼は勤務中眠くなり集中が途切れたりすることはない。

夜の担当と交代した後、A90は今日の作業の記録を受け取る。そこには

「作業効率2.50(枚/秒)、平均作業効率2.35(枚/秒)」

とだけ端的に印刷されている。これを見てA90は溜息をついた。彼は作業効率が平均を大きく下回った日が続いたものが、どのような処理をされるのかを知っていた。彼はそれに対する恐怖のみをモチベーションにして、毎日の仕事をこなしているのだ。

A90の帰る部屋は、ベッドと電子レンジ、冷蔵庫が置いてあるだけでいっぱいの小さなものだった。この日、彼が帰ったとき、段ボールが、部屋に残っている余白を埋めるように置いてあった。

段ボールの上には「A248-A090 成績良好のため、ロボットを贈呈する。今後も、励むように」とだけ書いた紙が貼りつけられていた。注意深く側面を見ると「キム・ロボット社」「ロボットはあなたの生活を快適にする」と印字されている。「ロボット」とは何か、A90には分からなかった。数秒の間困惑していたが、部屋には彼自身と寮の運営者しか入ることができないことを思い出し、恐る恐る段ボールを開封した。

段ボールの中には、人がしがんで縮こまったような形をした金属の塊が入っていた。なめらかな表面は、小さな部屋とA90を明瞭に映していた。

金属の塊は、ゆっくりと動き出した。その動きは人で言う、

立つという動作だったが、立つことによつて見えた全体像は、その物体が人であることを完全に否定していた。

手には指があつたが、足には指がなかった。手足はあつたが、服のようなものはなかった。そしてこれが一番不気味なのが、顔のあるべき場所には何もなく、平たい金属の表面がA90を映しているだけだった。

声が聞こえた。外見とは異なり、現実の女性のような声だった。

「こんばんは。私はキム・ロボット社の量産型ロボット製品番号G407です。あなた様のお名前をおっしゃってください」

突然の質問に、彼は戸惑った。名前を聞かれることなど、今まで一度もなかったのだ。

彼は周りからA90としか認識されない。だから、彼自身も自分のことをA90としか認識していなかった。「自分の名前」とはなんだろうか。単純作業ばかりの記憶の海を潜り、海底にあるぼんやりとした記憶から、数度見ただけの、戸籍に書かれた名前を思い出した。

「ニコライだ」

「ニコライ様ですね、よろしく願います」

彼はニコライはロボットをじつと見つめた。金属の平面でし

かないはずのロボットの顔に、まるで目があり、それがニコライ自身を見ているように思えたのだ。それは、工場の上司や同僚たちが彼を見るのとは違い、彼の心の部分をとらえているようだった。

「私は、ニコライ様の業務の効率化のため、生活の補助を命令されています。主に仕事前・仕事後の食事の調理、部屋の清掃を行います。もしよろしければ、その他の雑務も勝手に行わせていただきます。よろしいでしょうか」

「ああ、問題ない」

ニコライは、今までにないほどの心の高ぶりを感じていた。誰かが自分のために自分に話しかける、ということがどれほど喜びに満ちたことなのか、彼は生まれて初めて知ったのだ。

「私はニコライ様の言うことに従うようプログラムされておりますので、私に可能なことであればなんでもご命令してくださいませ」

「分かった」

「私に命令するとき、G407と製品番号でお呼びしてもいいですが、他にニコライ様のつけた名前でも構いません。どうなさいますか」

「ソフィアと呼ぶ」

ニコライはロボットの名前を決めるのに全く悩まなかった。

無骨な製品番号で呼ぶ気にはなれなかったが、そもそもニコライが知っている名前は、戸籍で見た母と父と自分の名前だけだった。ロボットは明らかに女性的に作られているので、ニコライが思いつく候補は一つしかなかったのだ。

「了解しました。これからよろしく願います」

お辞儀をしているかのようにロボットソフィアは体を折り曲げた。ニコライには、彼女が笑っているように思えた。

ソフィアがニコライのもとに来てから、数日経った。彼の仕事は以前から何も変わらなかったが、彼の生活は一変した。

朝、体が誰かに揺さぶられているのを感じて、起きる。

「おはよう、ソフィア」

ニコライの第一声はニコライを揺さぶっていたソフィアへ向けられた。

「おはようございます、ニコライ様。お食事が出来上がっています」

朝食と夕食には、最低限の調理だけされた粗末な食事の代わりに、色鮮やかな手間のかかった食事を摂っていた。

ソフィアと他愛もないことを話しながら食べ終わると、工場に行く準備をする。ソフィアが服を手渡したり持ち物を整理したりしているおかげで、すぐに準備が終わる。そして毎朝、本来の時間よりも早く部屋を出た。

工場に行くまでの道のりも、以前とは違って見えた。路傍に生えている雑草は何種類かのものに分けられることに気づき、新たな種類の雑草をきよろきよろと探していた。

工場につくと、栄養ジュースを飲み、担当する場所へ向かった。まだ始業には十分ほど時間があつたが、ニコライは交代する相手に陽気に声をかけた。

「やあ、長い間疲れただろう」

「ああ。しかし毎日のことだ」

返事はそつけないものだったが、ニコライは気にせず話をつづけた。

「今日は早く上がったらいい。僕が早めに交代するよ」

「……」

「大丈夫、作業時間はスコアに影響しないから。ただ君の負担が少し軽くなるだけ」

怪訝そうにニコライを見ると、動かしていた手をゆっくりと離した。ニコライは間を開けずに仕事を受け継いだ。

「ねえ、君の名前は？」

「A49」

「A49、君にもいいことがあるといいね！」

A49は奇妙なものを見るかのようにニコライを見ると、逃げるように帰ってしまった。

ニコライの作業効率、少しずつ上がっていた。しかし、ニコライは作業効率の書かれた紙を受け取ると、ちらりと見ることもしないで、ぐしやりとポケットに突っ込んだ。彼は、もはや作業効率のために仕事をしていなかった。部屋に帰ったとき、「おかえりなさいませ、ニコライ様」とソフィアが迎えてくれる、その喜びのためだけに仕事をしていたのだ。

ニコライが新たな喜びを得るほど、ニコライの求める喜びは増えていくようだった。彼はソフィアとの会話が単純な受け答えに収まっているのが気に入らなかった。

「ソフィア。僕は君ともっと話がしたい。僕の質問にただ君が答えて、僕の話にただ君が相槌を打つだけじゃ嫌だ。君の考えをもっと知りたい。君という存在をもっと知りたいんだ」

「私の……考えですか？ ニコライ様の思っている通りのことができるかは分かりませんが、やってみます」

「あと、その敬語もやめてくれ。ニコライ様なんて呼ばなくて

いい。いつも僕がソフィア、と呼んでいるように、ただニコライと呼んでくれ」

「分かりました。いえ……うん、分かった」

彼女は少し首をかしげた。その動きはまるでに cand で笑っているようで、ニコライはつられて笑顔になってしまった。

「料理がうまくいったの。食べてみて、きっとおいしいから」

「うん、すごく美味しい」

「調味料に栄養ブロックBを少し入れてみたの」

「料理に栄養ブロックを入れるなんて、考えもしてなかったよ。意外と合うものだね」

「この料理が特別なのよ。他の料理も試してみたけど、全然合わないの。なんでかしら」

「さあ。栄養ブロックBの成分に関係があるかもしれない」

ニコライは幸せの絶頂にいた。ソフィアと共にいることが楽しくて、工場に行くのが、少し辛いほどだった。しかし、ソフィアとの生活を維持するという確固たる信念がそれに打ち勝って、彼は迷いなく工場へ向かうのだった。

ソフィアがニコライのもとに来てから、ニコライには数えきれないほどの日数が経った。あるとき、ソフィアが言った。

「管理システムから連絡が来たわ。成績良好のため、何か贈呈したい。欲しい物を言うこと。だそうよ」

「欲しい物か……。二人で遊べるものが欲しいな」

「二人で遊べるもの……。伝わるかな。とりあえず、伝えておくわ」

「ちょっと待って。ソフィアは何か欲しい物ある？」

「いえ、これはニコライの成績がよかったことに対するものだから。それに、私も二人で遊べるものがあると嬉しいわ」

「それもそうか。じゃあ、そのまま伝えてくれ」

いつもの会話のようだったが、ニコライはほんの少し違和感を覚えた。ソフィアの本質をまだ理解出来ていないという不安が、心の隅の方で焦げ付いていた。

数日後、ニコライが工場から戻ってくると、部屋に荷物が届いていた。届いたままの状態でベッドの上に置いてあり、ただでさえ狭い部屋がさらに狭くなっていた。

「開けてくれ」

ニコライがそう言うと、ソフィアはびりびりと段ボールを開け、あつという間に中に入っていたものを取り出した。

「これは何？」

「トランプっていうのよ」

「トランプ？」

「54枚のカードがあつて、表にはいろんな模様と数字が、裏には全部おなじ模様が書いてあるの。いろんな方法で遊べるおもちゃよ。遊び方、教えてあげる」

ニコライは、書かれた模様と数字が違うカードだけで、何十種類もの遊びをできることに驚嘆した。労働のことしか知らなかったニコライにとって、数々の創意工夫によって作られたトランプは、想像もできないくらいのが天才が作り出したとは思えなかった。

「ソフィアがこのトランプを発明したの？」

「いいえ、違うわ」

「なら、どうしてソフィアはトランプの遊び方を知っているの？」

「トランプが届いたときに、自動でインストールされたの」

インストール、という機械的な単語にニコライは顔をしかめた。心の世界が雲で覆われるような嫌な気持ちになった。

だが、ニコライはトランプをすぐ楽しんだ。ニコライがはまったのは神経衰弱というゲームだった。54枚のトランプを裏が見えるように並べ、相手と交互に2枚ずつめくる。その2枚が違う数字であれば、その2枚を表に戻す。同じ数字であれ

ば、その2枚を取り、最終的に持っているトランプの枚数が得点となる。単純作業ばかりしてきたニコライにとって、常に変化のあるゲームはとても心躍るものだった。

工場から帰って、ソフィアの作った夕食を食べ、それから寝るまでの間、ずっとトランプで遊ぶという生活が長い間続いた。

ニコライはトランプに夢中だった。仕事で布を仕分けているときも、トランプのゲームでどうやったら勝てるかを考えていた。

だが、ニコライは未だソフィアに勝てていなかった。最初は挑戦しているようで楽しかったが、段々と勝てないことにいらいらとし始めるようになった。

「あー、今日も勝てなかった。全然うまくならないや。才能がないのかな」

「そんなことないよ。最初よりずっとうまくなってる」
「でも、今の僕より最初の君の方がずっとうまい」

ニコライは、自分がどうしようもない怒りをソフィアにぶつけているだけだと分かっていた。それでも止まらなかった。

「きつと、インストールしたんだろ。必勝法を。いいや、してなくても、絶対僕は勝てない。頭の出来が違うんだ」

ソフィアはじつとニコライを見つめていた。何も言わなかった。

「どうせ僕はこれから、勝つことなんてできないんだから、一回でもいいから、負けてくれよ」

少しの間のあと、ソフィアは言った。

「わかった。もう一回しよう」

ニコライはゆっくりと息を落ち着かせ、トランプに向かった。言うてはいけないことを言ってしまったのだと思った。いつもより、ゆっくりとトランプをめくっているような気がした。そして、結果はニコライの勝利だった。

「ソフィア」

「何？」

「多分君は、僕の言うことならなんでも従うだろう」

「ええ」

「それは、君に埋め込まれたプログラムだろう」

「……ええ」

「僕は、君が僕の言うことに従うことなんて求めてないんだ。僕は、君と対等になりたいんだ。僕に遠慮したり、僕を気遣ったりする必要なんてない。僕は、ありのままの君が見たいんだ」

「ですが、私が来た目的は」

「そんなのどうだっていい。僕は、君の本質を知りたいんだ。だから、君は君の好きなようにやってくれ。これが僕の最後の命令だ。どうか、お願いだ」

ニコライは、真つすぐにソフィアを見た。ソフィアの本質が、ちらりと見えた気がした。

「……分かりました。私は私の好きなようにします。本当にこれでいいのですか？」

「ああ。ありがとう」

「もう遅いですから、寝ましょう」

ソフィアはベッドから離れると、部屋の定位置へと戻った。

ニコライは、少しの期待を覚えながらも、ゆっくりと意識の底へと落ちていった。

父の顔も母の顔も見なかった。自分に親がいると証明してくれるのは、戸籍に書かれた名前だけ。もしそれがなければ、自分が培養液の中で生まれたと言われたら信じてしまっただろう。

物心がついたころは、工場内の施設で他の子どもたちと暮らしていた。最低限の教育が終わった後はすぐ、子供でもできる

ような仕事を割り振られた。

工場での仕事は、ニコライの人生の全てだった。苦だと思ったことはなかった。同時に楽しいと思ったこともなかった。

僕は何のために生まれてきたのだろう。何度も疑問に思い、何度も無視してきた。答えは今でもでない。だが、最近夢を見ることが増えた。草がいっぱいに広がった世界で、一人の女性とトランプをして暮らす夢だ。何もかも現実的ではない夢だが、喜びにあふれた夢だった。

次の日の朝は、奇妙なことにいつもと同じようだった。朝起こされ、朝食を食べ、工場に行く用意をした。しかし、会話は一言もなかった。

工場につくと、まずは栄養ジュースを飲んだ。なんとも思わなかった。

夜の担当と交代し、仕事が始まる。布が大量に置かれていて、それをニコライが種類ごとに仕分ける。簡単だが、間違えてはいけないので、気の抜けない仕事だ。

仕事の時間が終わり、交代すると、どっと疲れがやってきた。休憩なしですつと立っていたので、腰が痛かった。

今日の作業の記録を受け取った。

「作業効率1.90(枚/秒)、平均作業効率2.34(枚/秒)」

久しぶりに見たが、実感としても作業効率が落ちていることは分かっていた。周りを見回すと、いつの間にか自分の背が周リよりずっと高くなっていることに気が付いた。それは同時に、年を取ったということを表していた。

いつもより、ゆつくりと部屋に帰った。帰路の草花を見て、新しい種類を探した。もう何年もの間、新しい種類を見つけていなかった。

部屋のドアを開けた。ドアを開けただけで、隅々まで見えるほど狭い部屋には、ベッド、電子レンジ、冷蔵庫、そして、夕食が置いてあった。

ソフィアは居なかった。ニコライは、自分が失恋したことを知った。

一人の部屋で夕食を食べるのは、久しぶりだった。今までソフィアと暮らした日々を思い返しただけで、喜びが胸の中をいっぱいにした。

「例え虚構だとしても。残り少ない人生、きつとこれだけあれば生きていけるよ。ありがとう」

ニコライの呟きは、部屋の余白へと、消えていった。

今日の日記です

文月

朝、目が覚めると消費を忘れていました。前日に牛飼いの夢を見たのが良くなかったんでしょうか。消費はひかりオシドリと同じくらい重要なことなのに、それを失った朝はどこか気分が良かったです。

起きてからそれほど経たないうちに朝食を摂るのが普段のルーティーンです。今朝は概念をいただきました。作りたて・穫れたての概念は瑞々しくて美味しく、久しぶりに生きていることを実感しました。

朝食を食べたので、食べ終わる頃には消費を思い出してしまいました。私たちは消費なしでは生きていけないのでしょうか。百年後も、二百年後も……。こう考えると時間の質量もなんだか抑圧的に感じます。

午前中は仕事を行いました。仕事は全く非生産的で無意味です。まあ私の仕事は労働も兼ねるので無意味は言いすぎかな。とはいえ、仕事が人間として生活に役立つような気は一切ないのです。

昼食を摂ります。今日はなんだか拘りたい気分なので久しぶ

りに概念以外のものを食べました。そう、トマトです。概念じやないものが一番体にいいですね……。って、体にいいなんて考えていると概念になってしまいますね。自重自重。

午後はようやく活動ができます。仕事からも労働からも（ほんとど）解放され、街に繰り出して豊かな網目を辿ることができます。小説を読むかのように。それでいうと、今日は少し面白いことがありました。歩いていたら前から互いにレッテルを貼り合った記号集合がやって来たのですが、片方が躓きかけたのを境目に一気に雰囲気が悪くなり、最後はもう片方がその記号集合を突き飛ばして去っていききました。表面を記号で飾っている人は心情もまるで記号のようにコミカルに変化するのですね。諸行無常諸行無常。

ともかくも商業施設に入り、対価を払って概念を飲食します。いやそういう時にこそ実体を食べなさいよ、そう仰る方もいるでしょう。しかし、実体を食べるのは意外と体力がいるのです。やっぱり人間は概念を食べるように作られた生き物なのです。だからほどよく酔ってリラックスするには概念がちようどよいのです。

帰る途中で、ふと今日のことは全部私の妄想にすぎないと気づきました。私は現実には仕事をし、概念を食べましたが、全部

私を通した認識でしかありません。それは後ろ葉のように儚いことではありませんか。

途端に主観が空虚になっていきます。芯を抜かれたトビの根のように、空洞になってしまう。その時の空、私の認識の外にあつた空こそが本物の空だったのです。

どれほど綺麗でしょう。

総じて、今日は収穫アリでした！

蔓

綿毛

資料番号：PTMB-1679382

以下の文書は、Y氏の住んでいた市営アパートの部屋で発見された日記の抜粋である。

月曜日

起きたら鼻から蔓が伸びていた。やたらと鼻がごわごわするものだから、超弩級の鼻毛でも生えたのかと思って手鏡で顔を映してみると、なんだかやたらと細長い緑色のものがぶらさがっていた。気持ち悪かったから抜いた。振じりながら力を込めると、鈍い音を立てて蔓がちぎれた。断面はうっすらとした桃色で、血の混ざった鼻糞がこびりついていて、気味が悪くなってきた。ゴミ箱に捨てた。やけにつるつるした表面の感触が指先に残った。

頭の右側がずきずきする。抜いた時に力を込め過ぎたのだろう。せつかく早起きしたのに、食欲も無くなってしまった。そのまま仕事に行つて、帰つて、寝た。

火曜日

起きたらゴミ箱からなにか生えていた。赤ん坊の背丈くらいの細長いものがゴミ箱の蓋から突き出ていて、周りには捨てておいたゴミが散らばっていた。しばらく考えて、昨日の蔓だと分かった。一晩でここまで伸びるものなのだろうか。いっそう気味が悪くなってきた。やたらと白っぽいのだ。巨大なもやしに見えないこともない。しかも、意外と硬い。鋏で切ろうとして刃をぐいぐいと押し込んで、切れ込みが入るだけで、なかなかちぎれないのだ。それに、切っているとやたらと頭が痛くなってくる。結局切るのはやめて、仕事に行くことにした。今日も食欲はわかなかった。

帰宅。蔓は朝方からは伸びていないようだった。切ろうかと思ったが、面倒になって、寝た。

水曜日

起きたら蔓は天井まで届いていた。昨日より灰色がかったいるように思えた。それに、臭い。つる植物に特有の、あのむせするような匂いが部屋に充満している。そろそろ業者をよぶべきかもしれない。

木曜日

起きたら蔓が巨大化していた。巨大化と言っても、高さ自体は天井に少々食い込むくらいでそこまで変化はないのだが、昨日までよりも格段に太くなっている。大人の男の二の腕くらいだろうか。ゴミ箱はもはや蔓を支えきれずに横倒しになっていて、そこから灰色の蔓が複雑に絡まりあいながら伸びている。上に行くにつれて蔓の絡まり具合は複雑になっていって、なんだか巨大な脳味噌のように見えた。

仕事は休んだ。物置からノコギリを取り出してきて、ひたすら切りまくった。根本は硬すぎて切れなかったが、上の方は比較的よく切れた。刃を入れるたびぶちぶちと音を立てて蔓がはじけ飛んだ。半透明の汁が零れて、胃がむかむかした。

切り終えた蔓はゴミ袋にまとめて玄関に置いておいた。蔓は根元を残してほとんど無くなってしまった。

それにしても、やけに頭が痛い。むくんでいる感じがする。病院に行くべきだろうか。

金曜日

知らない人から電話がかかってくる。電話帳に登録してあるのに、思い出せない。どうしてだろう。

土曜日

思い出せない。何も思い出せない。通話履歴を見ても、知らない人ばかりだ。どうして。

日曜日

また鼻から蔓が伸びてくる。切っても切っても、すぐ伸びてくる。寒い。知らない人から電話がかかってくる。リョウ君つてだれだろう。寒い。寒い。

月曜日

知らない人から電話がかかってくる。

火曜日

たくさん鼻血が出てしまった。脚が硬い。なんだか木の幹みたいだ。

水曜日

寒い。

金曜日

もうたくさんだ、ごめんなさい

土曜日

脚が床に根を張って動かなくなってしまった。無理やり引っこ抜こうとしたら足首が外れた。木屑がぼろぼろ落ちた。掃除しないと

日曜日

寒い

これ以降、資料の損傷が激しくなり、判読が不可能である。なお、Y氏の部屋には木屑が散乱しており、壁には頭を何度も打ち付けたような跡があったが、資料に記されている蔓の袋については確認できなかった。

〈顧問〉

森本 晋
神徳 圭二

〈七十七回生〉

加藤 湊人
酒井 涼
宮井 智明
目片 仁
渡邊 広脩

〈七十八回生〉

安藤 稜脩
岩瀬 一誠

〈八十回生〉

天野 晃希
物部 知達

宵の明星 第三十二号

二〇二四年三月三十日 初版

編著者 灘校文藝同好会

表紙 安藤 稜脩

発行 灘校文藝同好会

印刷 灘校生徒会

製本 灘校文藝同好会

非売品

無断転載及び転売を禁じます



灘校文藝同好会